

佳作

小さなせなか

神奈川県横浜市立小田小学校三年 山田 結心

「ゆいちゃん、ぎゅうして！」

わたしの弟は、わんぱくではずかしがり屋さん。そんな弟は、見た目ではわからないけれど、びょう気があります。とっても元気だからわたしもついついびょう気のことを、わすれてしまいます。

今年の春、いつものようにけんしんへ行ったら、すぐに手じゅつをすることになりました。「まだ二才なのに、手じゅつだなんて、だいじょうぶなのかな、いたいことたくさんするしこわいよね」と、たくさん心配になりました。

おとうさん、おかあさんが、

「手じゅつをして、わるい所をとらないと、今度はそこがくさってしまう。くさってしまったらもつともっと大へんになるから、小さな体で手じゅつはこわいしふあんだけれど、家族みんなでおうえ

んしようみんながんばろう。」

と、はなしてくれました。弟にも、おかあさんが、お話していて、

「わかるのかな？」

と、わたしが言うとおかあさんは

「小さくても自分のびょう気とむき合うこと、小さいながら理かいすることができるとだよ。ちりょうはただなおすだけではなくて、お話ししていくことからがちりょうなの。」

と言いました。

わたしはこのときは「二才だからわからないよ」と思っていました。弟がたいいんしたときのえがおや入いん生活の様子を、おかあさんから聞いて、理かいができました。

入いんの日からは、特しゆなびょういんなのでわたしはカギのかかったドアからのまどごしでしか弟に会えません。

小さな小さな弟のせ中を見て、「がんばれ、ぜつたいせいこうするからだいじょうぶ」と、心の中でなんども言いました。弟のすがたを見ているわたしが、ないてしまひそうです。

夜おそくに、おかあさんが家に帰って来て、

「しょちもヤダヤダしないでちゃんとしたし、いつもの時間にはねたよ。ないてしまうのはふつうのこと、ちゃんとわかっているよ。」

と話してくれました。はなから「くだ」を入れたり、点てきしたりするすがたは、むねがくるしくなりました。

手じゅつの日、学校から走って帰るとおばあちゃん

が「ぶじに終わったよ。」

と、言ったしゅんかん^①に体の力がぬけて

「よかったー！」

と大きな声が出ました。

家族は四人。四つの電きゆうがないと明るく光りません。一つでも元気がないとピカピカにならないのです。みんながささえ合って生きていること、いのちの大切さや重みを考え直すことができました。

小さな弟ががんばるすがた。とてもむねにひびいた、弟のたいいんした時の言葉。

「ゆいちゃん！お外にいこう。」

とえがおで走って行ったすがたはずっとわすれられません。